障害者教育・福祉学研究
第10巻，pp. 33～40（2，2014）

特別支援学校教員養成課程における実践的指導力の育成（1）

－学生の「学びのニーズ」の分析から－

船　橋　篤　彦（愛知教育大学障害児教育講座）

要約　今後の教員養成をめぐる様々な議論・検討の中で，「実践的指導力の育成」は大きな課題である。これに関連して，専門教育の見直しと教育改善の取り組みが進められている。

特別支援学校教員養成課程についても，多様な実態を有する児童・生徒への教育支援を担う教員を養成する為にこれまでの専門教育の課題を洗い出し，学びの積み上げに向けた教育について検討を行う必要がある。そこで，本研究では，特別支援学校教員養成課程の学生を対象として，「特別支援教育に関する学びのニーズ」のアンケート調査を行った。結果から，学生達は専門科目を通して，「教育現場に関連する内容・実践に触れることへの希求」や「障害者への関心やボランティア活動への意欲」を高めていることが示された。また，学びの積み上がりについては，「知識が増えた」「わかることが増えた」「実践の中で知識を活用できた」に関連した記述が多かった。以上の結果を踏まえて，学生の学びのニーズと特別支援学校教員養成課程における実践的指導力の育成について考察を行った。

キーワード：特別支援学校教員養成課程，実践的指導力，学びのニーズ

問題と目的

中央教育審議会（2006）による「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」を殊更に例にあげるまでもなく，近年，本邦における教員養成・教員免許制度は大きな転換点を迎えている。特に，今後の教員養成においては「教育課程の質的な水準の向上」が重視され，教員養成を行う高等教育機関には，カリキュラム編成の工夫・授業改善・教育評価基準の明確化など多岐に渡る改善が求められている。この動向に呼応するかのように全国の大学等においては，カリキュラムの検討（e.g., 原，2013）や学生の学びに対するニーズ調査（e.g., 道田ら，2013），さらには教育現場が求める教員養成の在り方（e.g., 麻生ら，2013 ）など関連する研究知見が蓄積しつつある。

しかし，これらの研究の多くは「小中学校の教員養成課程」に関連したものであり特別支援学校教員養成におけるカリキュラム検討については未だ検討途上にあると言える。では，何故に「特別支援学校教員養成ではカリキュラム検討に遅れが生じている」のであろうか。その理由として，免許状取得に関連した障害種別の講義（専門科目）配置の課題があげられる。

現在のカリキュラムでは，講義や演習形式により積み上げ型学習を企図したものが多く，特別支援教育の現況（障害の多様化，学校の複数障害種対応など）から，各領域を相互に関連付けたプログラム（縦横の積み上げ型学習）であることが望まれている。このような観点に基づいた先行研究としては，教育実習を対象とした積み上げ型学習（井坂・森木，2013）に関するものがあるが，さらに専門教育科目における積み上げ型学習の具体的方策を検討していくことも望まれる。加えて，教員養成における学士課程の教育目標を達成する為の具体的方策において，「実践的指導力の育成」や「卒業後の進路等に関する具体的目標及び措置」が掲げられている現今の状況も鑑みた省察も必要であろう。

以上を踏まえて，本研究では，特別支援学校教員養成課程の学生を対象として，「特別支援教育に関する学びのニーズ」の実態調査を行う。同種の先行研究としては，特別支援教育教員養成課程の大学生が大学に期待するサービスについて明らかにした古澤ら(2010)の調査研究があるが，本研究では，特別支援専門科目に対する学生のニーズに焦点をあてる。この調査を通して，これまでの専門教育の課題を洗い出すと共に，専門教育における積み上げ学習に向けた教育について検討を行う。

方法

(1) 調査対象者

本学の特別支援学校教員養成課程に在籍する学部学生（1年生～4年生）107名にアンケートを配布した。アンケートは無記名であり，回収は指定の場所への投函方式であった。アンケート回収結果は，学部1年生(20名)，2年生（18名），3年生（22名），4年生（22名）の計82名（回収率76%）であった。また，82名の学生の性別内訳は男子学生が22名，女子学生60名であった。

(2) 質問項目

質問項目は，特別支援専門科目（Ss科目）や大学での活動におけるに関する実態・要望について，以下の質問を行った。尚，学年によってSs科目の受講や教育実習の実施の有無が異なることを考慮し，設問を

配置した。

A：共通質問項目（１～４年生が回答）
A-1　特別支援科目（Ss科目）に関する以下の10項目に対して「とてもそう思う・少しそう思う・どちらともいえない・あまりそう思わない・全くそう思わない」から選択し回答する。

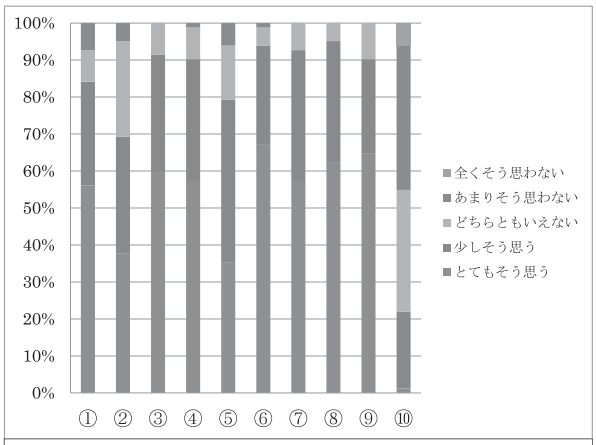
① Ss科目は大学１年のときからもっとたくさん受講したいと思う。
② Ss科目を受講して，受講前よりの障害についてより深く興味をもてた。
③ Ss科目を受講すると，ボランティア経験等の必要性を感じる。
④ Ss科目では特別支援教育の理念や福祉制度について深く学びたい。
⑤ Ss科目では実際の特別支援学校での教育実践について深く学びたい。
⑥ Ss科目では障害のある人やその家族（当事者）の話を聞いてみたい。
⑦ Ss科目では現場で働く専門家（理学療法士，作業療法士など）の話を聞いてみたい。
⑧ Ss科目では教育現場に訪問して，実践経験を積むような授業が必要だと思う。
⑨ Ss科目を受講して，自分の進路や職業のイメージが深まったと思う。
⑩ Ss科目は他の科目に比べて学ぶ内容が難しいと思う。

A-2　Ss科目に対する要望について自由記述を行う。
A-3　これまでに受講したSs科目の中で最も印象に残った授業内容について自由記述する。

B：学年別質問項目（２～４年生が回答）
本学の特別支援学校教員養成課程の学びが積み上げ式になっていることの説明を読み，Ss科目の受講による学びが積み上がっていると感じたことがあるかを「ある・ない・どちらともいえない」から選択する。「ある」と回答した場合，具体的にどのような学びの積み上がりを感じたかの記述を行う。「ない」または「どちらともいえない」を回答した場合，学びが積み上がるために特別支援学校教員養成課程のカリキュラムにどのような工夫が必要と考えるか記述する。

結果

まず，特別支援専門科目（Ss科目）に関する質問への回答結果について述べる。アンケート全10項目に対する特支学生（82名）の回答を図１に示した。



① ：Ss 科目は大学１年生のときからもっとたくさん受講したいと思う。
② ：Ss 科目を受講して、自分の進路や職業イメージが深まったと思う
③ ：Ss 科目を受講して、受講前よりも障害についてより深く興味をもてた。
④ ：Ss 科目を受講すると、ボランティア経験等の必要性を感じる。
⑤ ：Ss 科目では特別支援教育の理念や福祉制度について深く学びたい。
⑥ ：Ss 科目では実際の特別支援学校での教育実践について深く学びたい。
⑦ ：Ss 科目では障害のある人やその家族(当事者)の話を聞いてみたい。
⑧ ：Ss 科目では現場で働く専門家(理学療法士、作業療法士など)の話を聞いてみたい。
⑨ ：Ss 科目では教育現場に訪問して、実践経験を積むような授業が必要だと思う。
⑩ ：Ss 科目は他の科目に比べて学ぶ内容が難しいと思う。

図１　Ss科目に関する質問への特支学生（１年生～４年生）の回答

図１から，⑩だけが，他の項目とは回答の様相が異なることがみてとれる。これは⑩が「Ss科目の難易度」を尋ねた項目であり，「Ss科目へのニーズや必要性」について尋ねた他の９項目との相違が表れたと解することができる。⑩の回答結果をみると，Ss科目を難しいと感じている学生は全体の２割程度であることが示された。次に，全10項目のうち，７項目において「とてもそう思う」が50％を超えていた。特に「教育現場に関連する内容・実践」（⑥，⑧，⑨）への学びのニーズが高いことが分かった。また，「とてもそう思う」を“強いニーズがある”，「少しそう思う」を“ニーズがある”と読み替えた場合，上述のことに加えて，90％以上の学生がSs科目によって「障害者への関心やボランティア活動への意欲」（③，④，⑦）を高めていることが示された。学年によって，Ss科目へのニーズに相違があるかを検討する為，各質問項目の「とてもそう思う」「少しそう思う」を合計した割合で比較を行った（表１参照）。

表１の結果から，１年生は，ほぼすべての学生がSs科目をもっと多く受講したいと考えており，他学年と比較しても最も高い割合を示した。一方で，Ss科目を通してボランティア経験等の必要性を感じることや進路・職業イメージの深まりについては，他学年よりも低い傾向が見られた。２年生は，②から⑧の項目において１年生よりも高い割合を示しているが，全体的な傾向としては１年生と類似している様子がうかがえる。

３年生は，３つの項目（⑥，⑦，⑧）で100％となっ

表１　Ss 科目に関する質問項目に対する「とてもそう思う」「少しそう思う」の合計割合

	１年生合計	２年生合計	３年生合計	４年生合計	全学生合計
①Ss科目は大学１年のときからもっとたくさん受講したいと思う。	95%	78%	86%	78%	84%
②Ss科目を受講して，受講前よりの障害についてより深く興味をもてた。	85%	94%	86%	100%	92%
③Ss科目を受講すると，ボランティア経験等の必要性を感じる。	75%	94%	96%	95%	90%
④Ss科目では特別支援教育の理念や福祉制度について深く学びたい。	80%	89%	72%	77%	79%
⑤Ss科目では実際の特別支援学校での教育実践について深く学びたい。	90%	95%	91%	100%	94%
⑥Ss科目では障害のある人やその家族（当事者）の話を聞いてみたい。	85%	89%	100%	95%	92%
⑦Ss科目では現場で働く専門家（理学療法士，作業療法士など）の話を聞いてみたい。	90%	100%	100%	91%	95%
⑧Ss科目では教育現場に訪問して，実践経験を積むような授業が必要だと思う。	80%	89%	100%	91%	91%
⑨Ss科目を受講して，自分の進路や職業のイメージが深まったと思う。	50%	50%	73%	100%	70%
⑩Ss科目は他の科目に比べて学ぶ内容が難しいと思う。	10%	6%	23%	46%	22%

ており，実践的内容や障害当事者・家族への関心の高さが示された。また，１，２年生と比して，Ss科目の難易度を感じている者が多いことも分かった。さらに４年生では，半数近くの学生がSs科目に一定の難易度を感じていることも示された。他方，４年生はすべての学生が，Ss科目を通して，障害への関心を深め，特別支援学校での教育実践に関心を持ち，進路・職業イメージを確立していることが明らかになった。

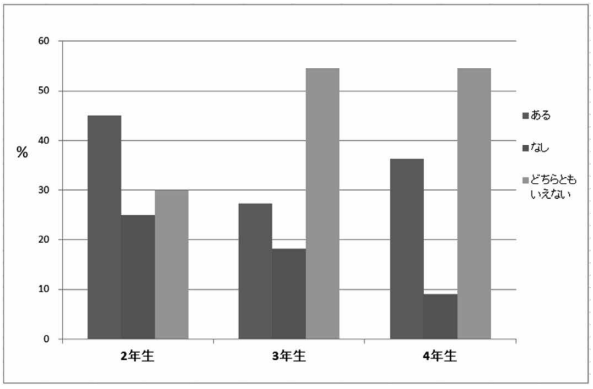


図２　Ss科目における学びの積み上がりに関する回答（２年生～４年生）

図２は，「Ss科目における学びの積み上がり」に対する回答について，２年生・３年生・４年生の比較を示したものである。ここから，２年生は他学年と比べて「ある」と「なし」の回答割合が高いことがわかった。他方，３年生と４年生では「どちらともいえない」が半数を超えるという共通性が見いだされたが，４年生は「ある」の回答が３年生よりも高かった。

次に，表２～表４に各学年の学びの積み上がりに関する自由記述の結果を示す。重複した内容の記述もあるが，今回の分析では集約は行わずに原則として原文に忠実に記載している。但し，長文の記述は文意を損ねないように留意した上で要約を行った。

表２　２年生における「学びの積み上がり」に対する自由記述

１）学びの積み上がりが「ある」の自由記述
・今まで知らなかったことを知ることができた
・１年の時に学んだことをもとに２年で深い授業をした時に学びの積み上がりを感じた
・１年生の時の方が幅広く学んだように感じた
・以前に習った知識をもとに，次の授業が深まっている感じ
・基礎から発展へと進んでいくため，徐々に詳しく知ることができる。基礎が出来ていないと発展は理解するのが難しいと思う
・前にならったことがでてきた時
・聴覚障害者の授業の繰り返しが1年でできなかった補足部分を学べた
・概論をふまえた上で心理生理の内容など一歩進んだ内容を扱っていると感じた
・理解が出来ている内容については，感じ方や視点が変化してきたから。

2）学びの積み上がりが「ない」の自由記述
・意識したことがないし，同じことをやっているように思う時があるから
・同じようなことをやっている気がする。
・1・2年で同じ内容を繰り返し学んでいる気がする。2年生になってから，1年生の時ほど新しい学びがなくなった
・そもそも意識したことがなかった。授業で復習を取り入れるといいのではないか。
・授業の関連性が少ない。1つの授業ごとに終わっている感じがある。もっと先生方での連携が必要だと感じる。加えて，継続して同じ人と交流できるともっと学びが深まると思う。
3）学びの積み上がりが「どちらともいえない」の自由記述
・2年生の授業は1年生でやった内容の復習が多い気がする。知識が身についているが，積みあがっているとは思わない。
・授業数の改善が必要（授業を増やす，単位に関わらず授業を新設する）

表３　３年生における「学びの積み上がり」に対する自由記述

1）学びの積み上がりが「ある」の自由記述
・特別支援教育全体について学んでから，細かい領域を学ぶとき，前者で学んだことが生かされていた
・根本的なことを学んでから，障害者個人の様子を知る
・1年生の時にしっかりと特別支援の基本が身についていたので，その後の2年，3年の内容が身についたと思う
・1年生で概論を勉強し，2年生から専門的に勉強していく中で積み上がりを感じた
・1・2年で既習したことが3年の講義で確認後，細かい部分を新たに学ぶことができた
2）学びの積み上がりが「ない」の自由記述
・1年生でやった内容とあまり変わらないこともある
・他の専門科目と連携をとってほしい。それぞれバラバラなことをやっている気がする
・授業名が漢字ばかりで堅苦しいもので覚えられない。分かりやすいものにして欲しい
・授業を受けて，特別支援教育についての知識が深まった感じがしない。どちらかというとボランティア等で理解が深まったので，実践的な技能が身につくカリキュラムにする必要があると思う。
・内容をもっと段階的にしていく
3）学びの積み上がりが「どちらともいえない」の自由記述
・基礎などを学んだ授業から専門的な授業までの期間が開きすぎると，結局は基礎・概論の復習のようになるので，期間をなるべく短くしてほしい。
・それぞれの授業が独立していて，内容も重なっている部分が多いので，授業間の連携がもっと必要だと感じる
・専門の学びについては基礎から発展に移るところで，あまりつながりが持てていない。発展の内容が急に細かいものに移り今まで学習したものと関係させるのが難しい。
・同じ話を繰り返し聞いていると思うことがある。実践が少ないように思うので座学だけではなく実践を増やしてほしい
・障害種ごとに授業を分けるのではなく，関連させることが大切だと思う
・それぞれの教科の繋がりが分かりにくいので，もう少し明確になったらよい
・学年が上がるごとに内容は専門的に深く学んでいることは実感するが，中には復習していくという流れが多いような気がする。教育現場の状況等をもっと知りたい。
・各領域の先生が同じ話をするので連携してほしい。
・理念・概念についての授業が多いので実践的な授業がもう少し増えて欲しい。前期と後期と連続して1つの科目の内容だとつながりがあると思う。
・知識を修得するだけでなく，実態に体験してみることでその知識について十分理解する必要がある

表４　４年生における「学びの積み上がり」に対する自由記述

1）学びの積み上がりが「ある」の自由記述
・1・2年で基礎的なことを学び，2・3年で発展的な内容を行う為，授業とボランティア，アルバイトなどの経験とが相互に理解に役立つと思う。
・4年生の授業で知能検査の読み取りをした際に，特徴から子どもの様子がイメージできる時，障害特性の理解を積み上げていると感じた。
・障害種別の困難さと支援の方向性について理解したこと
・知識の学習をした上で実習をすることで，学びを生かしたり，新たに何が自分にとって課題かを知ることができた。それは積み上がりだと思う。
・肢体不自由の授業で障害特性を学び，それを職場体験実習で生かすことができた。WISCについて，自分たちで検査した後にそれを活用する方法を学べた。
・3・4年の授業を受講して，1・2年より実践的になっていると感じる（ディスカッションや教師体験など）
・障害特性などの基本的な知識を学び，具体的な指導法や映像などにより障害のある人の実態を知った上で特別支援学校で実習をしたことで実になった。
・基礎で学んだことが実習ボランティアに生かされ，その経験が授業にもつながったから。
2）学びの積み上がりが「ない」の自由記述
・根本的に改革する必要がある
・講義名のイメージと講義内容が一致しておらず，何を学んでいるかが断片的である。複数の講義で同じ内容を扱っていることが多いので学びの積み上がりという感覚がない

3）学びの積み上がりが「どちらともいえない」の自由記述

・授業で毎回，確認テストがあると覚えられるので同じ内容でも何度も確認したい
・もっと定期的にテストが必要だと思う。実践的な授業を増やして欲しかった。現場に出た時の自信につながる。
・学生自身が，学びの振り返りをすることが必要。それぞれの授業の１～２回目は以前に学習した同じ領域の講義をしっかりと振り返るような時間が必要。
・それぞれの授業が独立しているように感じた為，以前にどの授業でどのように学んだかという振り返りが必要
・学年があがっていくに従って，学ばなければならないと強く感じ始める。特支カリキュラムの工夫というよりも，個人のボランティア経験や危機感・意欲が関係してくるように思う。
・学びから体験を繰り返すことや当事者のお話を聞くこと
・講義の学びは限界があるように思う。1年生の時はまだ知識が浅いこともあり分からないことも多く，学びのつながりを感じることもある。しかし，それもボランティア等で子どもと接している人だけかもしれない。いずれにしても，知識と経験が結びつくようにする必要があると思う。
・1年の頃は座学でよいかもしれないが，2年次からの授業では，もっと体験的・経験的な内容が必要。特別支援学校（特に知的障害）に行く機会が欲しい。
・基礎知識を丁寧に教えることも大切だが，障害のある人達が，どのように生活をしているのか等を知ることにより，発展的な理解ができると思う。
・1年～3年まで受講して，忘れてしまう内容も多い。4年生になり，教育実習をしたり，将来の教職へのビジョンが見え，学ぶことへの意欲が増した。しかし，振り返った時には多くのことを忘れていると気づいた。各講義で最後にテストを行うのではなく適宜，行うことや自分で調べる課題があるとよい。
・実際の子ども達とのかかわりの経験を重ねていくことで次第に講義の内容が深く理解できるようになった。概論的な内容を1・2年生で行うと記憶に残りにくいかもしれない。

自由記述の結果から，学びの積み上がりについては，「知識が増えた」「わかることが増えた」「実践の中で知識を活用できた」に関連した記述が多いことがわかる。2年生は，入学時，すなわち1年前の自分自身の「知識・理解」と比較している為，積み上がりを感じる者が3，4年生と比して多いことが考えられる。他方，3年生と4年生の回答結果からは，知識と実践の繋がりが十分に実感しにくいことが「どちらともいえない」の回答を選択する要因になっているのかもしれない。自由記述の様式からは，学年が上がるごとに記述内容が具体的になっており，特に4年生については，明確なニーズとそれに基づく改善案の提示なども示されている。これに関連して，表5に1年生～4年生のSs科目に対する要望を示す。

Ss科目への要望について，1年生は最も記述数が少なく，重複した意見が多かった。1年次に配当されているSs科目の少なさに対する意見も散見された。2年生～4年生においては，共通する要望として「指導法など実践的な内容を扱った講義」や「現場の教員や専門家の講演」があがっている。4年生では，回答者の記述内容が多岐に渡るものが多く，現時点で学ぶ必要性を感じているトピックについての要望が多くあげられた。

次に，Ss科目で印象に残った授業内容に関する自由記述について表6に示す。演習形式で学ぶ内容や指導法に関する実技等をあげる者が多く，Ss科目への要望と重なる結果であった。とりわけ，4年生は他学年よりも実習形式の授業内容について記述するものが多かった。

考察

本研究の目的は，学生へのアンケート調査を通して，これまでの専門教育の課題を洗い出すと共に，専門教育における積み上げ学習のあり方について検討を行うことであった。以下では結果を踏まえて4つの観点から考察を行う。

1）学生のSs科目に対するニーズについて

Ss科目に対する学生のニーズの結果から，学生達は，Ss科目を通して，知識が蓄積し，未知の知識への希求と実践への欲求が高まり，進路や職業像の確定に至る過程を踏んでいることがうかがえた。学生からのニーズとして多かった記述は「実践的内容を増やして欲しい」というものであった。この傾向は3年生以上に強く見られ，座学と実践の繋がりを感じにくいことが背景として考えられた。また，学生達の中には，座学で学ぶことに積極的な意義を見出せず，「実践＝役に立つもの」という理解をしている者がいるのかもしれない。座学と実践を二項対立的なものとせずに，座学と実践の往還を目指すことが教員養成の現代的課題になっている。この点も踏まえて，学生の座学に対するイメージを変えていく必要があるのではないか。

一方で，大学での座学とボランティアや実習といった実践的活動を結び付けて学びを深めている学生も多く，すべてのプログラムを大学が用意するのではなく，学生自身が選択し，活動できることを支援する仕組みが今後も求められると考える。一例としては，Ss科目の中で，自身のボランティア体験報告などを取り扱うことがあげられる。

表５　１年生～４年生のSs科目に対する要望（括弧内は同意見の数）

１年生	２年生	３年生	４年生①	４年生②
・視覚障害教育について勉強してみたい（3） ・支援を必要としている人がどういうことをよく感じるのか知りたい ・1年次にSsが少なすぎる。希望校種を2年生で決めるのであれば，早くから色々な障害に触れたい。(2) ・実践的な内容を学習したい（3） ・コミュニケーションについて，障害者の生活の実態など ・言語障害に関する内容（2）	・実際の教育現場をたくさん見たい(4) ・座学ではイメージがわきにくいので，現職の先生のお話や学校見学をしたい（3） ・障害についての基本知識を広く学びたい（2） ・小学校関連の授業が多く，Ssの授業が少ないので，時々，自分は小学校と特別支援学校のどちらに行きたいのか分からなくなる ・特別支援教育に今どのようなことが求められているのかを具体的に知りたい ・幅広い意見が知りたい。否定的なものも知るべきだと思う。	・実践的な授業を増やして欲しい（指導法や状況に応じた行動や考えなど）(8) ・特別支援学校の現状・知識だけでなく実践活動（4)。 ・通常の学校の特別支援学級ではどのような指導が行われているのか知りたい（3)。 ・教育現場訪問する機会を増やして(3) ・他大学の先生や専門家の人の講義を増やして欲しい。 ・障害のある人からみた教育現場の話 ・教育現場の話が聞けるとよい（個に応じた指導や支援の話） ・学校と連携する福祉について学びたい	・障害のある子どもへの支援について（実践内容）（4） ・視覚障害について（3） ・現場をたくさん見学したい，外部講師の話を聞き，障害種に偏りなく知りたい。(3) ・作業・理学療法士の話を聴きたい。(2) ・特別支援学級での指導について（2） ・特別支援学校の授業について知り，議論したい ・特別支援学校での教科指導や自立活動について，保護者の思いやその対応について知りたい。 ・実習のように障害のある子どもと深くかかわりたい	・指導案を書いて，授業ができるようになりたい。 ・知的，肢体，聴覚，どの分野も平等に現場で学びたい。 ・障害に対しての理念の中で自分がどのような考え方に共感するのか知りたい。 ・知的障害児や自閉症児への教育実践 ・障害児の卒業後の進路について ・障害者の学校以外での生活 ・障害のある人達の発達（幼少期から老年期まで） ・社会や地域と障害のある人達の関係について。 ・事例検討を通して学びたい

表６　Ss科目で印象に残った授業内容に関する自由記述（括弧内は同意見の数）

１年生	２年生	３年生	４年生
・聴覚障害者の授業・聴力の測定（5） ・障害のある人（当事者）の話を聞いたこと（3） ・触手話で出席をとったこと（2） ・高機能自閉症，アスペルガー症候群，知的障害に関する内容	・聴覚障害に関する講義・実際に聴力検査を行ったこと（5） ・動作法の教育実践（4） ・障害に関する絵本の朗読 ・アヴェロンの野生児の事例 ・事例を題材にしたディスカッション ・福祉現場で働いている方のお話	・外部講師の集中講義。事例検討で意見交流をすることで理解が深まった。(4) ・補聴器を使った授業で，実際につけてみたことや聾学校の見学。(2) ・動作法などの実践的な内容の講義（2） ・LDに関する話 ・知的障害者教育概論の講義。知的障害や発達障害についての概論，実態など知的障害全般についてのイメージがとても深まった。 ・WISC等，検査器具に実際に触れながら説明を受けた講義 ・DVDで知的障害に関する内容をみたこと ・指文字を教えてもらった授業。普通の会話などでも指文字や手話を使っていた。	・実習形式の内容（発語指導，摂食指導，動作法など）（9） ・肢体不自由特別支援学校での職場体験実習（6） ・集中講義で医師の立場からの発達障害に関するお話を聞いたこと。(6) ・病弱特別支援学校に訪問したこと ・就学前の子ども達とのかかわり，生活の様子を見学できたこと ・発達検査 ・障害児の保護者による講演 ・障害児が学校以外でどういう生活をしているか

２）Ss科目における学びの積み上がりについて

１～２年生は「知識が増えること」の観点，３～４年生は「実践との繋がり」の観点で，学びの積み上がりを感じる傾向が示された。現状のカリキュラムでは，１～２年生で障害に関する基礎・概論的内容，３年生以降に教育実践的な話題や実習などが配置されており，カリキュラムと学びの積み上がりが機能的に結びついている面もある。加えて，３年生と４年生は半数以上が学びの積み上がりについて「どちらともいえない」と回答していることは，考察を深めていく必要がある。特別支援学校教員養成のカリキュラムでは，図３に示すような，各領域の学びの積み上げ（縦糸）と領域間の学びの結合（横糸）により専門性が構築されていくと考えられる。ところが，今回の結果からは，学年進行と学びの積み上がりが一致しない回答（自由記述）も多かった。中でも３・４年生では「同じことを繰り返し学んでいる気がする」「授業間で重なりあう内容も多い」といった回答があり，授業担当教員間の共通認識や連携という面で課題が感じられた。さらに，「学生自身が学びの振り返りをすること」や「自分で（学習内容を）調べる機会をつくる」といった学生自身の学ぶ姿勢の改善を回答する向きもあり，このような意見をもとに，座学の中に既習内容に関するまとめやグループ発表，確認テストなどを導入することで，学生が学びの積み上がりを実感しやすくなることも予想される。

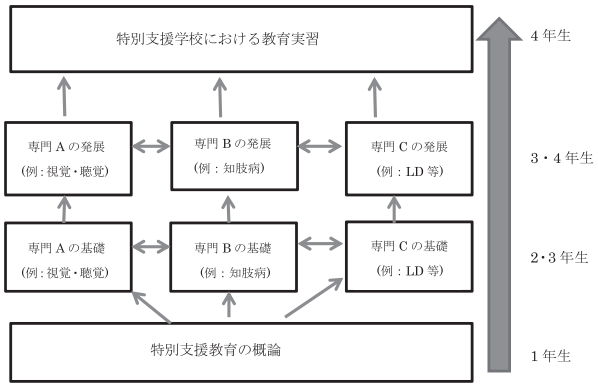


図３　特別支援学校教員養成課程における「学びの積み上がり」

３）Ss科目の今後の課題について

田中ら（2008）が行った特別支援教育の教員養成課程学生のアンケート調査によれば，深く学びたいと思っても，学びを放置してしまう学生やどのように学んだらよいのか分からず必要な技能が修得できない学生が相当数，存在することが示されている。本研究の結果では，１年生において95％の学生が，１年時からたくさんの専門科目を受けたいと考えていること，さらに１年生の自由記述に「特別支援のコースに入学したのに，Ss科目が１～２つしか受講できずに，不満がある」といった回答もみられた。学生のニーズにすべて応えることが即座に専門教育の充実に繋がる訳ではない。しかしながら，学生が学びのニーズを発する機会を保障し，授業改善を筆頭に手のつけやすい箇所の改善策を提示することは学生と教員の疎通性を向上させ，結果的に講義運営を容易にするかもしれない。学生と教員の相互に恩恵をもたらす改善策の立案が，専門科目の質的向上には不可欠であると考える。

多くの学生が，特別支援学校での体験実習や学校見学，授業観察を望んでいること，この事実を学校教育現場や教育委員会に届けることもまた重要な課題と思われてならない。OJT（On the Job Training）の考え方が一般に流通している中で，学習ボランティア制度等をはじめ，教育現場と教員養成課程の学生の繋がりも新たな段階を迎えている。教育現場のニーズと学生自身のニーズをマッチングさせる役割を大学教員が取ることも一案として考えられる。

「実践的指導力の育成」という命題に向き合う上で，これまで以上に，座学での知識修得と実践による体験的学習の繋がりを考慮したカリキュラム編成を検討する必要がある。これに加えて，学生の学修状況と学びのニーズを踏まえた授業配置運営・改善とその成果に関するデータを蓄積することも今後の課題である。

４）本研究の限界と課題

今回の調査結果は，各学年の学生に対して，特定の時期（11月～12月）に実施して得られたものである。本学では，３年時に基礎免許実習（小学校），４年時に主免許実習（特別支援学校）を実施している。今回のアンケート調査を実施した時期は，３年生は小学校，４年生は特別支援学校の実習を終了しており，この点は結果に影響していると考える。具体的に言えば，４年生であっても，実習前と実習後では，Ssに対するニーズや講義への要望等が異なってくる可能性がある。

また，Ss科目の難易度について，３年生以降は難易度を感じる学生が増えることが分かった。この点は，講義で扱う内容が，３年生以降で高度になることを示していると考える。学生が，講義を難しく感じることについて，そのこと自体が問題ではなく，「難易度を感じること」が学習に影響を及ぼしているかどうかに積極的な関心を向ける必要がある。今後のアンケート調査では，学生のSs科目に対するニーズの経年的変化を追い，検討を続けていく予定である。

謝辞

調査に協力を頂いた特別支援学校教員養成課程の学生に感謝を申し上げます。尚，本研究を実施するにあたり，本学の教育研究重点配分経費（平成25年度採択：研究代表者 船橋篤彦）の支援を受けました。関

係各位にはこの場を借りて深謝申し上げます。

引用文献

古澤健太郎・神園幸郎・田中敦士・緒方茂樹・大沼直樹・内田芳夫・片岡美華・雲井未歓（2010）特別支援教育の教員養成課程で学ぶ大学生が大学に期待するサービス～琉球大学学生への質問紙調査結果～　琉球大学教育学部紀要, 76 , pp. 189-197.

井坂行男・森木亜季（2013）特別支援教育教員養成における積み上げ型教育実習に関する基礎調査　大阪教育大学紀要第Ⅳ部門, 61（2), pp.1-10.

田中敦士・神園幸郎・緒方茂樹・大沼直樹・片岡美華・雲井未歓・内田芳夫（2008）特別支援教育の教員養成課程で学ぶ大学生の学習態度と技能習得の実態～琉球大学学への質問紙調査の結果から～　琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター紀要, 10, pp. 31-40.

中央教育審議会（2006）「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申)」

原清治（2013）実践力のある教員を養成するためのカリキュラム・マップの構築に向けて　教職支援センター紀要, 4, pp.13-24.

道田泰司・吉田安規良・浅井玲子（2013）教育実践学専修の学生は大学教育に何を求めているか？　琉球大学教育学部紀要, 83, pp. 101-112.

麻生良太・森下覚・河野伸子・長谷川祐介（2013）小学校と中学校の教員は教員養成大学・学部に何を求めているのか　　大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要, 30, pp.57-69.